

ヘーゲル『精神現象学』における対象と意識

川太 啓司

日本大学大学院総合社会情報研究科

Object and Consciousness in Hegel's "phänomenologie des Geistes"

KAWATA Hiroshi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In this paper the relation between "Object" and "Consciousness" in Hegel's important work Phenomenology of the Mind (phänomenologie des Geistes) is considered. Attention is focused on the way and manner of mental development from "sensuous assurance" through "perception" to "understanding". This is in order to know that the formation of the mind from the simple to the complex is traced in the opening chapter of the work.

はじめに

G・W・F ヘーゲル(1770—1831)は、主著である『精神現象学』においてわれわれ人間意識の形成過程を最も単純で素朴な意識である感覚的確信(sinnliche Gewißheit)から、対象を捉える理性的な自己意識へと到る意識の経験する過程を展開したのである。こうした意識の展開は、端初的な意識形態である直接的で無媒介な感覚的確信から対象意識を性質の持った物として捉える知覚(Wahrnehmung)する意識へと進展し、さらに対象と自己意識の関係を考察するという悟性(Verstand)へと到る意識の形成過程の展開を指し示したものである。こうした人間の意識は、われわれを取り巻く世界において対象を捉えることによって次第に対象意識と自己意識の関係を、把握してゆくのである。そこで本稿の課題は、対象と人間の意識との様々な相互関係のうちにある感覚的確信から知覚や悟性的な意識などが形成されてゆく人間の意識形態を把握することにある。その認識の仕方は、われわれを取り巻く世界において対象である事物を発展過程のうちに捉え把握することにある。そして、対象意識を捉えることで対象となる事物をわれわれ人間の認識過程として捉え自己と関係する自分自身の意識を吟味し、思考する悟性的な意識において統一的に認識するのである。

このような悟性的な思考する意識(Bewußtsein)を捉えるには、われわれが対象とする世界を意識が経験することによって対象を意識的に捉えて、多くの意識形態を把握することにある。われわれ人間の持つ感覚的確信や知覚は、事物が感覚器官に及ぼす作用を通じて直接現象することで我々の感覚に与えられる個々の事物について、特定の固有な状況によって条件づけられている。だから、対象意識と自己意識を把握するには、対象である事物を捉え思考する悟性的な意識である意識形態を思考過程のうちに取り込み相互的に吟味することで、各々が捉える役割を認識することにある。次いでわれわれの認識過程においては、対象である事物を概念的に把握しその成果を媒介に反省的に思考することで、対象である事物の性質と関係する認識構造を捉え対象の本質を認識するのである。

第一章・対象と感覚的意識

われわれ人間の意識は、対象である事物が感覚器官に及ぼす相互作用を通じて意識形態を形成することで意識するのである。だからヘーゲルは「意識は一般に外的または内的な対象の知識であって、対象が精神の働きの加わることなしに意識に現れるか、それとも精神によって作り出されるかは問題ではな

い。その意識の諸規定が精神自身に帰せられるかぎり精神は、精神の活動の面から考察される」(1)のである。このように意識は、対象を直接存在する意識するものとして捉えることで己のうちに捉える自己意識をどう把握するかにある。だから「意識とは自我の対象に対する特定の関係である。我々が対象から出発するかぎり、意識のもつ対象の差別に応じて意識にも差別がある」(2)と言うことである。そのことは、対象意識と自我の対象に対する己の意識に関係することである。存在するものは、それに対する己が意識するものが知であり感覚的確信であって感覚的確信の対象は、ただ「いまここ」に在ると言うこのものとの思い込みにある。

そのことは、対象とする知の感覚をそのまま受け取り確信するような知であり、直接的な対象こそ無媒介に存在するという立場である。だから、ヘーゲルは対象を捉える「意識はさしあたり直接的意識である。それ故に、対象に対する意識の関係は対象の単独な媒介されない確実性である」(3)としている。それ故に意識は、対象を直接的な対象として存在することで自己のうちに反省している対象として規定され直接的に個別的なものとして、規定されている感覚的確信なのである。そして、自己に関係する意識は、単に抽象的な自我や形式的な思惟に関わる諸契機を含んでいるにすぎない。これらの契機は、意識にとっては客観の諸規定である。それ故に、感覚的確信は、単に存在するものであって実存する事物や個別的なものとしての客観について知っているだけである。だから、感覚的確信は、内容においては最も豊富な意識として現れるが思想においては最も貧しい意識なのである。

感覚的確信は、対象を捉える自己の豊富な充実を形成している諸々の感情的な規定なのである。感情的な規定は、意識の素材である人間精神において意識の存在であり且つ意識が自己内に見出すところの基本的で質的なものである。感情的な規定についてヘーゲルは「心の自己内反省すなわち自我は、この素材を自己から引き離し、且つこの素材にさしあたり存在の規定を与える」(4)ものである。空間的および時間的な個別性は、ここにおいて感覚的確信の対象を規定しているように本来的な直観作用に属する

ものである。この意識の客観は、ここでは差し当たり意識に対してもっている対向的な関係の方から取り上げられるべきである。すなわち、感覚的確信における客観は、意識にとって外面的なものであってまだそれ自身において外面的なものや、自己の外的な存在として規定されていない。感覚的確信は、この場合にのみ客観が感官を通してわれわれに現れると言うことによって意識とその他の様式から、区別されていないのである。

だから、対象を捉える感覚的確信は、対象である事柄と客観的に対応することで即時的で直接的な知を把握する感覚的意識なのである。感覚的意識は、その立場からは対象を捉えるこの客観が外面的な客観であるとまた内面的な客観であろうと、その意味においては各々を包含したものとなっている。感性的なものは、客観が或るものとしての他者になるが或るものとしての自己反省である事物は多くの特性を持っており、そして自分の直接性における個別的なものとして雑多なものをもっている。だから、感覚的意識における多様な個性は、それ故に幅を持ったものになる関係としては対象である事物の反省的な規定や一般性から成る一つの雑多性である。これらの諸関係や反省的な規定は、一般性と思惟的な自我によって措定された論理的な諸規定である。だがしかし、このような自我に対しては、現象してゆくものとしての対象もまた大きく変化するものである。感覚的意識は、対象のこの規定においては直接的な知覚作用なのである。

こうした感覚的意識を捉えるには、対象を即自的にあるがままに直接的な知を受け入れる態度を取るべきであり、眼前に現れてくる知を少しも変えてはならないのである。そのことの意味は、対象に対するわれわれ人間が最初に捉える直接的な知は目の前に見出す対象であり、それ自身が感覚的な知であって無媒介で直接的なもので現にそれ自体として、直接的に存在する素朴な意識なのである。この直接性に対する表現は、対象が在ると言うことでありそれ自身において規定されている。こうした単純な感覚的意識は、われわれが捉える外的対象についての直接的な確実性なのである。感覚的な知をヘーゲルは「この今もこの此所もどちらもすぐに消え失せる性

質のものである。今はそれがあるときにはもうなく、他の今がそれに代わって出てくる。しかし、これもまたすぐに消えてしまう。しかし同時に今は存続している。この存続している今は普遍的な今であって、この今でもあの今でもあると共に、またそれらのいずれでもない」(5)としている。

すなわち、指し示された此所は、単純な従って特定の此所ではなくて多くの物のうちにある普遍的なものである。それ故に、現実的に本当に存在するのは、抽象的で感性的な規定性ではなくて普遍的なものなのである。こうした内容は、感性的な意識を感覚的な存在として把握することで普遍性を捉えるのである。そして、感覚的確信の経験する内容は、直接的で具体的であるのでこの確信は最も豊かな内容であるかのように把握され、無限に豊富な内容を持つ意識であるように見えるものである。この感覚的確信の経験する内容は、広がる空間と時間とにおいてわれわれが当面の内容の外に出て行く時にもこの豊富な如何なる限界も、見出され得ないかのようなものである。このような、感覚的確信の内容は、端初形態のうちに直接的で最も真なるものとして示されているのである。だから、素朴な意識である感覚的確信が考察する対象は、直接的なものとしての真なる現実的な存在なのである。

感覚的確信についてヘーゲルは「この確信はまだ対象から何ものをも取り去っているのではなく、対象をあますところない完全な姿において己の前にもっているからである。しかしながら、実際においては、この確信は自分で自分自身が極めて抽象的な、極めて貧弱な真理であることを表明している。即ちこの確信が自分を知っているものについて云っているのは、ただそれが存在する」(6)に過ぎない。ここにおいては、「いま、ここ」に在る直接それ自体で存在し他とは異なる単純で純粋なこのものとして在るだけであって、対象も純粋なこのものとして在るだけの単純で即自的な意識なのである。この感覚的意識は、対象的意識として自ら展開しているという理由でこの事物や事柄を確信しているわけではない。また、感覚的確信している意識は、区別を持った数ある性質のためにそれ自身で豊かな関係であって他の事物に対し多様な関係を持っているから、感覚的

に確信しているわけでもない。

こうした対象は、感覚的確信の真理には全く関係が無いものでただこれとしか言いようのないものである。「自我も事柄もいずれも感覚的確信において多様な媒介を意味しはしない。自我と言っても多様な表象ないし思考の意味をもたないし、また事柄と言っても多様な性質の意味を持たず、却って事柄は存在し、そうして事柄が存在するのは、それが存在するからである」(7)だから、事柄が存在すると言うことは、これこそが感覚的な知識にとって本質的なことであり、この単純で直接的な実態が真理をなしている。こうした感覚的確信は、対象との関係において直接的なものとして無媒介で純粋な関係のうちにある。この素朴な感覚的意識は、自我であってそれ以上の何ものでもなく純粋なこのものがただ在るということである。素朴な意識である感覚的確信は、個別的な人々が純粋なこのものとして個別的なものを知るのである。だが、この感覚的確信の本質は、この確信を自らの真理だとしている純粋な存在をわれわれから見ると、今なおこのものとは別の多くのことが対象を捉える即自的で直接的な、真なるものとしての存在なのである。

だからヘーゲルは「我々にしてこの区別について反省して見れば、一方も他方も感覚的確信においてもただ単に無媒介にのみあるのではなくして、同時に媒介せられたものとしてもあることがわかるのであって、自我は他者を介して即ち事柄を介して確信を持っているのであり、そうして事柄もまた全く同様に他者を介して即ち自我を介して確信のうちにある」(8)このような、本質と実例との間には、直接的な無媒介態と媒介態との区別があるがこの区別はただわれわれだけが立てるものではなく、我々はそれを感覚的確信それ自身において見出すのである。このような区別は、今ここで規定したものではなく感覚的確信の内に在るような形式で受け取られなければならない。この感覚的確信は、一方は単純で直接的な存在者として実在的な対象として措定されているのである。だがしかし、他方においては、それ自体で在るのではなくもう一方によって在るような非本質的なものが媒介されたものとして措定されているのである。こうした自我の意識は、知であってこ

れは対象が在るからこそ知っているが自ら存在することもできないのである。

ヘーゲルによると「対象は存在するのであり、真なるものであり、本質である。対象が知られると知られないと関係なく存在し、たとえ知られないときにも存続するものであるのに、知の方は対象が存在しないときには存在しない」(9)ものである。このように、対象については、それが知られなくともそのまま存在しているのである。だがしかし、われわれが知覚する知は、対象がなければ存在しないのである。だから、対象が果して実際に感覚的確信であるそれ自身においてこの確信が言う通り本質であるかどうかは不明なのである。対象が本質的な実在であることは、この概念が果して対象の確信においてある実体に一致しているかが考察されるべきなのである。このように対象については、それが真であるように反省的に思考するようなものではなくて感覚的確信が自分で持っているような、対象を考察するだけである。そこにおいては、此处と今という現に在る二つの形で受けとるならばこのものが自分で持っているこのもの自身が、在ると言う形を取るのである。だから、感覚的確信は、このものとは何であるかと自ら問うべきものである。

感覚的確信は、対象において否定的なものの一般として持続するものである。だから、このように持続する今は、直接的で無媒介なものではなく媒介されたものなのである。なぜなら、「いま、ここ」に在ると言うことの意味内容は、他が在るのではないことによって永続するものであって自らを維持するものと、規定されているからである。これでもない、あれでもないと言うものは、このものならぬものであり、これで在ることにも無関係であるものは一般的なものと、呼ばれるものなのである。一般的なものについては、感覚的なものを言い表すものも普遍的なものとしてのことである。われわれが云っていることは、このものであるがこれは普遍的なこのものであってこれは存在一般のことである。そのことの意味は、在ると言うこと即ち在ると言うこと一般なのである。そして、一般的なものは、感覚的確信の真理であり言葉はこの真理を言い表すだけである。だから、感覚的確信が考察する対象は、直接的な

のとして真なるまだ様々の規定や個別性に対立している普遍的なものなのである。

こうした感覚的確信は、それ自身において普遍的なものが自分の対象の真理であることを示すのであるから、この確信の本質として持続しているものは純粋な存在そのものである。だがしかし、この存在は、直接的なものとしてではなくてかえって否定と媒介とをもって本質とするようなものとしての存在である。ここにおいて感覚的確信は、対象を捉える知が初めに現れてきた時の関係と両者がこのような結果となって現れる関係とを比較して見るならば、事態は逆になっている。こうした対象は、感覚的確信にとって本質的なものであったものが今ここにおいては、非本質的なものとなっているのである。なぜならば、結果としての対象がそうなったものは、一般的なものはもはや感覚的確信にとって本質的であるはずであったものではなく、今ここに至っては反対の物の中つまり以前には非本質的であった物の中に、現存しているからである。だから、感覚的確信が考察する対象は、直接的な真なるものとしての素朴な存在なのである。

そこでイポリット(1828—1893)が、感覚的確信について指摘するのは「一切の現象学的発展の出発点は、感覚的意識あるいは直接知である」(10)このようにイポリットは、この自己同一は主観的な確信と客観的な真理との同一のことである、としているのである。意識の端初である感覚的確信と最後とを比較してイポリットは「直接的なものは、感覚的確信の中に存在しているが最後の章においては、この直接的なものが、本来の自分自身になり、内面的な媒介によって自分自身を現実化したのである」(11)さらに、イポリットは「われわれは、意識の出発点である感覚的確信が、意識の最も高度の真理であると同時にその最も大きな誤謬でもあるとみなすことができる。この意識は、自分では最も豊かな最も真実の最もはっきり規定された認識を所有していると思っている」(12)だから、われわれの意識は、感覚的確信のなかに存在している直接的に対象を知ることになる。直接的な関係が意味しているのは、直接的に対象を知覚する意識なのである。

このように対象は、感覚的確信にとって本質的な

ものであるはずであったが、今や非本質的なものである。そのことは、感覚的確信にとって本質的であるはずであったようなものではないからである。そこにおいてわれわれは、感覚的確信のこの客観的な実在性について経験が示すことのうちに意識の弁証法的な展開を捉えるのである。そのことの意味は、意識が現に存在する今を指摘するが今は真であると主張している。だが、われわれは、現に存在するその今に実在したものや廃棄されたものとして示すのである。つまり、われわれは、初めの真理を廃棄すると次いで廃棄されていることを今の真理として主張する。だがしかし、すでに実在したものは、現に実在するものではない。われわれは、実在したものは廃棄されたもので真理を廃棄しそうすることによって今の否定を否定することで、この今は現に実在するという最初の主張に還帰するのである。だから、現に実在する今を示すことは、その性質が現に実在する今を示すと共に直接的で無媒介な単純なものではなく、種々な契機を自からのうちに包含する媒介され知覚された意識なのである。

第二章・対象を知覚する意識

対象を知覚する意識が感性的なものを対象とするのは、感性的なものが直接的にある限りにおいてではなくてそれが同時に一般的なものである限りにおいてである。このような知覚は、感性的な規定と反省規定との混成なのである。われわれの意識は、対象を知覚することで意識するとそれは個別的なものであるが、同時に普遍的なものとして知覚する意識なのである。だから、この意識の対象は、種々な特性を持ったものであってこの多様で感性的な特性は各々において直接的に感情のなかにあるが、また同時に他のものへの関係によっても規定されており媒介されているのである。これら対象の持つ特性については、或るものに属していることから見れば各々の特性についてこの側面では個別性のなかに含まれているが、他面では普遍性をもっている。したがって、この側面から見れば諸々の特性は、個々のものを超越するものであって同時に互いに無関係である。だから、知覚する対象意識は、直接的なものであるが普遍的なものなのである。

このような、感性を超越した悟性は、対象をその真なる実態において取り上げ知覚しようとするがそれは単に直接的なものとしてではなくて、媒介されたもので自己内に反省したものと一般的なものとして取り上げようとする。そのことによって対象は、感性的な諸規定と諸々の具体的な関係や連関に関する広範な思想的な規定との結合なのである。このことによって、対象と意識との同一性は、もはや確実性における抽象的な同一性ではなく、規定された同一性としての知である。こうした知覚作用は、一般的にはわれわれの常識的な見地からの思考過程であり諸科学の立場である。だから、われわれは、個別的对象を捉え観察における感性的な確実性から出発するのである。そして、これらの感性的な確実性は、相互に関係させられて反省的に考察されることになるのである。こうした知覚作用は、反省的な思考により一般に諸範疇に従っての必然的で一般的なものである普遍的な経験によって、真理性にまで高められるべきなのである。

このように知覚作用は、感性的な素材の観察から出発するのであるが感性的な素材の観察のもとからさらに進んで、必然的で感性的なものを直接的に観察されない一般的なものに対して、関係させるのである。そして、知覚作用は、あらゆる個別化されたものを自己自身のなかで連関しているものと認識することで、諸々の事物の間に生じている諸関係や諸媒介を探求すると言うところまで、進展してゆくのである。それ故に、単なる感性的な意識は、事物を直接性において示すだけであるのに反して知覚作用は事物の連関を把握するのである。すなわち、こうした知覚作用は、これらの状況が現存しているならばその時はそこからこのことが帰結してくることを証明し、且つそうして事物を真実なものとして明示し始めるのである。この知覚作用の真なる実態は、対象が現象であり対象の自己内の反省は別に存在する内面的なものである。

ヘーゲルは「直接的な確信は真なるものをとらえ我がものとはしない。なぜなら、自分の真理が普遍的なものであるのにこの確信はこのものを捉えようと欲するからである。これに対して知覚は自分にとって存在するものを普遍的なものとして捉える。そ

ここで普遍態が知覚の原理一般である。これと同じように、知覚においてすぐ相互に区別せられる契機もまた普遍的であって、自我が普遍的なら、対象もまた普遍的である」(13)対象を知覚するものは、対象自身に内在する否定性を供えるから或る止揚されたものとして定立せられておりしたがって無としてではなく、限定された無としてある。換言すれば、或る内容のものは、このものである無として定立せられている。対象を知覚する対象意識は、性質を持ったものとして捉えることで知覚作用は普遍性という思考を持つから、知覚する対象意識を媒介にして真に迫ることになる。

そこで直接性と媒介性との統一は、対象を発展過程のうちに把握することで知覚する意識は固定的ではなく可變的な認識過程として捉えるのである。こうした知覚作用は、感覚的なもの自身がまだ現にある直接的な確信においてのものである。このように意識された個別的なものは、そうではなく普遍的なものとしての性質と規定されたものである。そこでヘーゲルは、知覚作用について「この塩は一樣の此処でありながら、同時に多様であって、白くあると共に辛くもまたあり、立方形でもまたあり、一定の比重のものでもまたある等々である。これら多数の性質のすべてが一樣なひとつの此処においてあり、したがって相互に貫徹しあい、どの性質も他の性質と違った別の此処ではなく、各々の性質が他の性質があるのと同じこの此処のどこにもありながら、それでいて同時に此処を異にすることによって影響しあうこともない」(14)のである。

自覚的に思考する意識は、実在する真理を手に入れないのはこの真理が一般的なものだからである。だがこの確信は、このものを手に入れようとするに対して知覚は存在するものを一般的なものとして受け取るのである。もとよりこの確信は、知覚の原理が普遍性であるように知覚のなかで互いに区別される契機も一般的なものである。この場合の自我は、一般的な自我であり対象は一般的な意識であって自覚的で悟性的な意識は自分の対象のなかで、自分自身に達するのである。このような悟性的な意識は、真理のなかに在ってなお自己確信なのである。この悟性的な意識は、思考する意識なのであるから

感覚的確信から知覚への過程は同時に一切の直接知の批判なのである。だから、感覚的確信は、感性的な直観を持つことで意識化してこの意識が直観的な関係のうちに直接的に、対象を知ることになる。そこにおいてヘーゲルは「普遍態という原理が我々にとっては発生しているから、我々が知覚を受け取る受け取り方は、感覚的確信の場合のように、もはや現象に従うものではなくしかるべく必然的なものである」(15)としている。

対象を知覚する意識は、その原理が生成してくるとき同時に二つの契機が生まれたけれどもそれらの関係は、現れると同時に消滅すると言ったものにすぎないものである。その一方を示すものは、運動であり他方は同じように運動であるが単純なものである。こうした前者は、感覚的な知覚であり後者は対象である。このような対象は、本質的には運動と同じものである。この対象の自己運動は、契機を展開させ区別するが対象は契機が総括的に把握されたものである。われわれにとっては、それ自体が原理として一般的なものが知覚の本質であるがこの抽象化に対し、知覚するものと知覚されるものという二つの区別されたものは非本質的なものである。しかし実際には、両方がそれ自身で一般的なもので本質であるから共に本質的なものである。各々の知覚は、両方とも対立したものとして互いに関係し合うものでその関係のなかではただ一方だけが本質的なものである。そして、本質的なものと非本質的なものの区別は、互いの両方にあてがわれねばならない。そこで単一なものと定められる対象は、本質であり知覚については無関心なのである。

知覚する働きは、運動であるから在ることもできれば無いこともできるものであって常住ならぬものであり、非本質的なものである。そこでこの対象は、もっと詳しく規定する必要がある生じてくる結果から対象の規定を簡単に展開する必要がある。だから、ヘーゲルは知覚された「対象の原理である普遍的なものは単純でありながら媒介されたものであるから、対象は媒介させられたものであると言うことが自分の本性として自分に供わっていることを表現せざるを得ないからそうすることによって、この対象は、多数の性質をもっている物であることを示すのであ

る」(16) 感覚的な知識の内容は、知覚に属するものであって直接的な確信に属するのではなく、このような自覚的で悟性的な意識はその内容がただ傍らにあるものに過ぎない。なぜなら、思考する意識は、否定を区別することで多くのものをその本質としているからである。それ故に、このものは、このものならぬ廃棄されたものとして措定され従って無ではなく一定であり或る内容の無である。

対象である事物を捉え知覚する意識は、対象意識であって最初にわれわれの対象となってくる知のことで端初的な知であるから、それ自身が無媒介な知で反省したり思いめぐらしたりすることなく感覚をそのまま受け取り、確信するような知である。そのことの意味は、無媒介なものや存在する物の知であって自分の対象が、意識とは無関係にそれ自体として客観的に存在しており、且つ一切の他の対象とも無関係で個別的なものである、と感じ取るような知である。だから、対象意識が考察する対象は、無媒介で直接的な存在なのである。そして、知覚する意識は、具体的には感覚によって与えられるものを反省的に思考することで対象の性質を捉え、事物の本質を知覚するのである。ヘーゲルによれば、意識経験を観察するこの知に変更を加えずその知のなす経験を、そのままに受け取らなければならないのである。そして、知覚する意識は、感覚的に知覚した性質を持った対象を捉えそれを媒介にして真なるものを探求するのである。

対象を知覚する意識は、時間と空間の広がりにおいても無限に多様であるし、また或る部分を採って分割してもたえず新たなものが見つかるのである。知覚する意識は、性質を持ったものとして対象を捉え知覚する意識を媒介にして、対象を固定的にではなく発生と消滅という発展過程のうちに意識を形成する、過程として捉えるのである。なぜなら、知覚する意識は、意識の端初である感覚的確信と違って普遍性という思考を持っているからである。そのことは、ただこれが此処に或るものが存在すると言うことではなくここでの対象は性質を持った具体的な事物であって、個別的なものとしか言いようのない実在を捉えるのである。だから、対象を知覚する意識は、直接的なものとして捉え知覚する存在である。

この対象意識は、対象を知覚する意識の方もこの個別的なものとしか云えない程度のものでしかないのである。なぜなら、この対象意識は、対象をあれこれ比較したり思考し判断したりするようなことで他人と自分とを比較するからである。

知覚する意識は、感覚的なものではなくて反省的な考察と自覚的な思考の働きのうちに対象の真理を求める普遍性を持っている。たとえば、塩は白くて辛いというような性質が対象のなかにあることを知覚は見出すのである。だから、ここで知覚が対象とするのは、今ここに在るこのものではなくて種々な性質を持ったものである。このような知覚は、存在すると思うものを一般的なものとして受け取るのである。もとより知覚の原理が普遍性であるように知覚のなかで直接的に区別される諸々の契機も一般的なものである。だから、われわれが受け取る知覚は、もはや感覚的確信の場合のように現れてくるままにではなくて必然的なものとして受け取るのである。素朴な意識である感覚的確信は、意識経験を観察するわれわれ人間が捉えたことに過ぎない意識のことである。それに対して、知覚する意識は、自らが経験の中で対象も自我も無媒介な個別的なものではないことを自覚してゆくのである。端初的な確信は、意識ではなく対象こそが無媒介に存在するという客観的な事実を捉えたにすぎない。

感覚的意識は、対象がわれわれの意識に関係せずにそれ自体として存在しており、他在の対象とも無関係に独自に存在する個別的なものなのだと確信するのである。そのことの意味は、対象こそが本質的なもので意識の方は意識化された概念という意味で非本質的なものである。そして、対象意識である知覚する意識は、それ自体として個別的に存在するものを意識することでこれは今ここに在ると言うのである。だがしかし、これとか存在するといった言葉は、あらゆるものに適用できる普遍的なものに他ならない。知覚する意識は、対象である事物を無媒介で個別的なものが真理である概念化された普遍的なものと把握するのである。対象に対する知覚する意識は、様々な色や形の感覚が豊かに与えられている点ではとても豊かだが、これはまだ低次の意識である。そして、そこに含まれる知は、様々な色や形な

ど性質を持った意識なのである。われわれが対象を捉える知覚は、対象を様々な性質を持った物として自覚的に意識するのである。

性質を持った知覚する意識は、そこで明らかになることは知覚する意識が自己運動であって経験の単純な過程に他ならないと言うことであり、知覚する意識それ自身が全くこの過程に他ならないと言うことである。だから、対象意識は、知覚する意識において真理であるこの結果に引き続き自ら進んでゆくそれについて経験するのである。対象を知覚する意識は、対象意識とでも言うべきものでこの意識は対象である事物をそれらの対象の真理対象と捉えることで、真実とは何であるかを求めるのである。直接的な対象意識を吟味するには、諸々の自然現象を統一的に説明する法則を捉えようとすることで、一般的な自然科学と同じように対応することである。この対象意識の特徴は、対象を意識から全く独立したものに見なしている点にある。たとえば、木の実について言えば、そこに存在する木の実が硬いが食べられる物などの様々な一般的な諸性質を見出すのである。対象を知覚する意識は、こうした知覚する対象意識を媒介にして真に迫るのである。

さらに、知覚する意識形態には、感覚的な感情や意欲や意志などの他にも活力と活気のより乏しい知覚である観念や印象があると D・ヒューム(1711—1776)は述べている。「活力と活気のより乏しい知覚は、一般に思考ないし観念となづけられる」(17)さらに、ヒュームは知覚と印象について「これらの知覚を印象と呼び-----それで私は、印象という名辞によって、われわれが聞く・見る・感じる・愛する・憎む・欲する・意志するときの、われわれの一切のより生き生きとした諸知覚を意味する。そして印象は観念と区別されるが、観念とはより不活発な知覚であり、それらをわれわれは上に述べたような感覚ないし心の受けた運動のいずれかを反省するとき意識するのである」(18)こうした強い知覚である印象は、常に弱い知覚である観念に先行するものであってまた創造に供給されている観念は、それに対応した印象の中に現出するものである。このような意識は、人間の感覚器官によって直接に捉えられるもので感覚や印象の段階から、思考する悟性的

な意識の段階へ進むのである。

第三章・悟性的な自己意識

悟性的な自己意識は、自覚的な悟性が具体的な現象を生み出すもとなるものであって力や法則を見出して把握するのである。この意識過程の全体の流れは、眼前にある対象を感覚的に捉える段階から出発して次第に対象と世界とを思考によって再構成することで、意識を捉え直してゆく歩みを把握するのである。また、そのことの意味は、同時に対象と自己とを全く別々のものと思っていた意識が自覚的な意識へと、転換してゆく過程なのである。悟性的な意識の最後の展開においては、対象世界の真理だと思っていた自然法則が実は対象世界を統一的に説明しようとする思考過程のうちに、事物の内在的否定と矛盾による自己運動であったことが、理解されてくるのである。だから、自分が対象の真理と思っていたものは、実は思考過程における自己運動だったのである。対象世界を捉える事物の自己運動は、対象意識が自覚的な自己意識へと転換してゆくことになる。対象である事物に内在する否定性は、否定され廃棄されることでこの他在が初めの物の廃棄されたものであり、それ自身がまた廃棄されこうして初めの物に還帰する運動なのである。

だがしかし、自己に帰った初めのこの事物は、初めにあった事物である直接的な事物とそのまま全く同じものではない。その事物自身は、他でもなく自己に帰ったその過程を示すことはそれ自身の自己運動なのである。対象である事物の自己運動は、今が真に何であるかを捉えて今が一つの結果であることを包括された今の多数なる実態であることを言い表すものである。そして、自己に還帰した自己意識は、自分の外なる対象ではなく自然的な意識ではなくてもっぱら対象である事物を捉える自己を意識するのである。この自己意識は、観察したり思考したりするような理論的な態度ではなく、自己の自立性と自由とを実現しようとして他者や自然に関わっていく実践的な態度をとるのである。われわれ人間が捉える理性は、自然的な意識である対象意識と自己意識との統一であって、対象のなかに自己を見出そうとする悟性的な自己意識なのである。

悟性的な意識が捉える対象の規定についてヘーゲルは「全く遇有的な面を持つが、しかしまた本質性、恒常的な面をもつ、ということである。対象が意識に対して後者の規定をもつ時、意識は悟性である。そこで悟性にとっては、知覚に現れる諸々の物は単に現象と見られる悟性は、物の内的なものを考察する」(19)のである。こうした悟性の内的なものは、物のもつ性質のなかで一面では現象から自由なのである。すなわち、それは自分自身に対して外的な面を形成しているところの物の多様性から自由なのである。しかし他面では、物のこの内的なものはその概念によって他の諸々のこの物に関係している。それ故に内的なものは、単純な力であってその力は定在するもので発現に移行する。こうした悟性をヘーゲルは「この概念が意識そのものに向けられると、即ち意識に自覚されると意識は他の段階に移る。今まで意識は外的なもの、どうしてもよいものである対象に関係していた」(20)のである。

悟性的な自己意識は、区別の全般が何らの区別でないような区別になったので意識とその対象との間の今迄のような区別の形はなくなるのである。思考する悟性的な意識は、やはり対象をもち他者に関係するがその他者は他者であって直ぐにまた他者でないような関係の他者である。すなわち、悟性的な自己意識は、自分自身を対象とする。このようなものは、端的に言えば物の内的なものは物の思想をなす概念である。こうした意識は、内的なものを対象とすることによって思想を同じように自分自身の反省を包含した形式を必要とする自分を対象とするのである。ヘーゲルは「知覚作用のさしあたっての真なる実態は、対象はむしろ現象であり、対象の自己内反省はそれに反して独立的に存在する内面であり一般者であるということである。この対象の意識が悟性である」(21)こうした内面は、一方では感性的なものにおける止揚された雑多性でありこのような抽象的な同一性なのである。けれどもこの内面は、他方においては雑多性を含んでいる。

しかし、内面に含まれているこの雑多性は、諸現象の交替の中にあっても自己同一性を保持している内的で単純な区別である。この単純な区別は、現象における法則の世界であり現象のゆるやかな一般的

な模写なのである。このような法則は、一般的で持続的な諸規定の対抗関係である自分が持っている区別が内的区別である限りにおいて、自分の必然性を自分自身に即してもっている。一方のそれらの諸規定は、他方の規定から外面的には区別されないものとして直接それ自身が、他方の規定のなかに含まれている。しかし、こうした内的な区別は、真なる実態における区別であって自分自身に即しての区別と何ら区別とは言えない区別である。悟性的な意識そのものは、主観と客観との相互に対する独立性を含んでいる意識が形式的に一般において、潜在的で自体的には消滅してしまっている。だからヘーゲルはこのような「自我は判断するものとして自分自身から区別されていない対象を持っている、すなわち自分自身を対象としてもっている」(22)のである。これが自己意識なのである。

さらに、ヘーゲルは、意識について「感覚的確信の弁証法において聴覚や視覚などは過ぎ去ってしまい、そうして知覚として意識は諸々の思想に到達したが、意識はこれらが無制約に普遍的なものにおいて初めて総合する」(23)と述べている。こうした意識は、感覚的確信から知覚する意識という普遍性を捉えなくては静止している単純な、本質として理解される。このような意識は、それ自身において自分だけでの存在と言う感覚的意識であるにすぎない。何故なら、そうした場合には、思考する悟性的な意識に本質でないものが対立することになるからである。しかし、悟性的な意識は、かくして本質でないものに関係づけられると悟性もそれ自身が非本質的なものとなり、そして意識は知覚の錯覚から脱却していないことになる。こうした悟性的な意識は、かかる制約された自分だけでの存在から己のうちに還帰したような自我なのである。

ヘーゲルは、悟性的な意識を吟味するに「悟性はたしかに己の真理に反することを対象の真理に反することを撤回したのであり、そうしてこの撤回によって悟性に生成したものが真なるものの概念ではあるけれども、しかし、この真なるものは即自的に存在する真なるものであって、まだ概念ではなく、言い換えると、意識の対自存在を欠いており、そこで悟性はこの真なるものの内に己を認めることなく

これを放任する」(24)としたのである。この存在する真なるものが、自分自身だけでその本質を発揮するので意識はその自由な実現には少しも参加せずに自由な実現をただ願望し、純粹に把握するだけである。こうした内実は、悟性が意識にとって真実の対象であるけれどもしかしこの悟性はまだ意識の対象としてある。悟性的な意識は、自分の概念としての概念を把握するにはまだ到っていないことが区別されるべきなのである。

悟性的な意識が捉える止揚という意味は、二重の意味を包含しておりその意味は弁証法的なものである。その内的意味は、否定することでもあると同時に保存するということでもある。この無という意味は、直接的な実態を保存しており感覚的でさえあるがそれは一般的で直接的な実態である。そして、有である媒介は、否定的なものを自分に持っているから一般的なものである。知覚された有は、自覚的な意識であるからこのことをその直接的な実態において表現しているから、区別され規定された性質である。そこでは、同時に一方が他方の否定であるような多くの性質が措定されているのである。こうした性質は、自分の持つこれらの規定性とは区別されておりそれらから自由な存在である。この普遍性は、自覚的に思考する意識における純粹な自己関係である媒体である。思考と存在との同一性の原理とは、事物の発展過程と自己の認識過程の同一性を求める人間意識の形成過程なのである。

感覚的確信から悟性的な意識へ至る人間意識の過程は、あらゆる知と人間の意識の形成過程を歴史的にたどることで対象を吟味し反省的に思考することである。そして、端初的な意識は、或る根本的な原理から出発して悟性的な意識へ至る過程があらゆる知と人間の意識を解明しようと、試みたものであるからである。このような、人間がもつ意識の原理は、それは人間の意識という在り方を深く考察することによって得られたものである。そして、あらゆる対象世界は、悟性的な意識のあらゆる場面において経験されるからである。根源的な意識は、この場合における反省こそ意識を進展させる原理であると捉えて自分の知を反省することができる。悟性的な意識の反省は、本質的には自己意識であり自己を安定さ

せ止揚する本質的な意欲こそが、悟性的な意識の進展する原理なのである。自覚的に思考する悟性的な自己意識は、意識されることによって対象となる世界が存在するのであるから、自覚的で悟性的な自己意識が考察する対象は、意識化され知覚されたものを媒介されたものとして捉える、真なるものとしての存在そのものである。

自覚的に思考する悟性的な自己意識は、意識の経験の場面におけるこのような発想を固定的な主観と客観を廃棄して、自己の意識経験に内在するものである。そのことは、悟性的な意識の経験の実質を成り立たせている対象である事物を捉え、それに対応する広義の知の形成過程を吟味するのである。ヘーゲルの反省的思考は、自分自身の知を自分自身で検討し吟味することである。換言するならば、すべてにおいて知覚され意識化された対象について吟味し思考することである。自覚的に思考する悟性的な意識は、対象を捉え思考することができるから新たな知を作り出せるのである。悟性的な意識の形成過程における反省は、対象となる世界において矛盾する事態に遭遇するからである。この悟性的な意識は、これまでの自分の知を振り返り検討し反省的に考察することで、新たな事態に対応する新たな知を作り上げるのである。具体的なものを対象とする悟性的な意識は、直接的な意識を意識化したものとしての真なる物の存在なのである。

ヘーゲルは、自覚的で悟性的な意識が自己意識の根本的な在り方を対象と関わりながら、自己同一性を達成しようとするにありと捉えている。自覚的で悟性的な意識は、自己意識でもあるから対象に対する自己意識を内的なものと見なして、その確かさを保持しようとするので自分が悟性的な意識を、持つことを確認する。この悟性的な意識の確実性は、自己同一性を得ようとするのが意識の基本的な傾向なのである。しかしながら、悟性的な意識については、確実性を脅かすものが意識に登場してくる。悟性的な意識は、閉ざされた場面においてではなく常に他在に向かって開かれている。だから、悟性的な意識は、常に脅かされてもいるわけで今までの自己では対応できなくなった時に意識は、新たなより包括的な自己意識へと移行する。つまり、自己同一性

は、それを他在なるものより包括的な同一性という歩みを意識は経験するのである。

このような、意識の形成過程は、直接的な対象こそが無媒介に存在するという感覚的な確信から意識を捉え対象を知覚する意識である対象意識の性質を持った物として捉えるのである。さらに、この知覚する意識は、普遍性という思考を包含した知覚する対象的な意識を媒介にして真なる悟性的な、自己意識へと迫るのである。知覚に媒介された意識は、対象を発展過程のうちに捉え知覚する意識を固定的ではなく可変的な認識過程として捉えるのである。対象意識と自己意識は、自覚的な思考する悟性的な意識と対象を捉える感覚的な意識の段階から対象と世界とを思考によって再構成し捉え直して、自覚的な思考する悟性的な自己意識へと進む過程を把握するのである。そして、対象を捉える自覚的な自己意識を媒介に概念化し認識するのである。ヘーゲルは、悟性的な自己意識においては物や感覚的なものにこだわらない思想だけを対象とするとしている。だがしかし、実際に意識を捉えるには、われわれの外にある対象である事物を発展過程のうちに捉えると同時に、自分自身のうちに内在する自己意識をも意識することで他在との関わりにおいて、統一的に各々の在り方を認識するのである。

ヘーゲルは「自己意識は、その名のとおりに自分自身についての意識である。しかし、人間は自分を直接に意識することはできない。人間が自分を意識の対象とすることができるのはその外部に存在する対象のなかに自分を見出すことを経験するからである」(25)さらに、ヘーゲルは「自己意識が対象のなかに自分を見出すことは、矛盾をはらんだ過程をたどることになる」(26)このような、悟性的な自己意識は、対象である事物がただ今此处にあるとするこのものと言う思い込みのうちに感覚をそのまま受け取り、確信するような知である。この自己意識は、対象的な関係を通じて事物に対するのではなく本質的には自我である己の自己意識に対するのである。こうした関係は、対象である自己意識にとっては否定的なものであるけれども意識が自分のうちに還帰してくるものと全く同じように、自体的には対象も自分のうちに還帰してくるのである。

このようにヘーゲルは、対象である事物を捉えるに直接「いま」「ここ」に在るという現実には在るものを感覚的にのみ捉えて、抽象的にしか説明していないのである。現に実在する客観的な事物は、ただ在るのではなくそれ自身のうちに矛盾を含みそこに内在する対立物の相互浸透のうちに、全体を示しているのである。われわれを取り巻く世界の対象である事物には、矛盾した傾向が含まれていることから全ての事物の発展過程においては、矛盾した傾向が現れるのである。こうした矛盾の展開は、その事物の発展する原動力をなすものでその意味から矛盾は認識の発展する原動力なのである。対象である事物を捉えるには、固定したものではなく発生と消滅という発展過程のうちに捉え、対象である事物に内在する矛盾や否定性の作用である自己運動のうちに発展過程を、把握することにある。自己運動とは、事物に内在する矛盾や否定性による作用で自分自身を止揚して他のものに変化することである。こうした事物の発展は、自己運動と否定性による自己発展であり事物の萌芽からそこに潜在する諸々の要素が、内的必然的に現出する過程なのである。

おわりに

一般にわれわれ人間の認識は、対象である事物を発生と消滅という発展過程のうちに捉え、対象である事物に内在する矛盾や否定性を自己運動のうちに発展の原動力として把握することにある。そして、われわれの意識は、対象である事物が感覚器官に及ぼす相互作用を通じて意識形態を形成することで意識するのである。そこにおいてヘーゲルは、意識・知覚・悟性という人間意識の形成過程を叙述することのうちに、対象を捉える意識を単純で直接的な感覚的な確信から知覚する意識と、自覚的に思考する悟性的な意識へと到る意識の形成過程を、展開したのである。だがしかし、そこでヘーゲルは、客観的な対象である事物の発展過程を捉える意識とわれわれ人間の認識過程である自己意識の形成過程と混同して展開している。そこにおいては、われわれが捉える対象となる客観的な事物の発展過程を我々人間の主観的な認識過程として捉え、悟性的な自己意識を概念の展開と同じように捉えたことにある。対象で

ある現実的な事物が発展する原動力は、事物自身のうちに内在する矛盾と否定性による自己運動であって、人間の意識や認識が発展する原動力は事物自身に内在する矛盾ではなくて、これまでの歴史的な成果としての認識と現実的な事物の認識との不一致とする矛盾なのである。

このような、ヘーゲルの認識の仕方は、到るところで主観と客観について混同しているのであるが直接的であると言うことが、直接的な認識として直観や表象を意味するわけではないし、知覚する意識を媒介に思考する抽象的な概念でも無媒介に与えられれば、直接的なのである。こうしたヘーゲルの認識の仕方は、自覚的意識が不断に発生と消滅する現実の世界の表象を分析し、そこに感覚的確信と知覚する意識という二つの構成要素を見出して、そのうちの知覚の方を捨象して先に感覚的確信の方を取り上げてこれを考察し、次いで初めに捨象しておいた知覚を取り上げてこれを考察し吟味するのである。そして、最後の認識過程においては、これら感覚的確信と知覚する意識を総合して自覚的に思考する悟性的な自己意識に到るとする意識の形成過程を、展開したのである。こうした分析と総合は、初めの感覚的意識の表象を自覚的意識の悟性的な概念として捉える思考過程を示したものにすぎない。このような、ヘーゲル哲学のうちには、われわれが学ぶべき弁証法的な成果と共にそこにはこのような克服すべき欠陥も含まれているのである。

註

- (1) ヘーゲル『哲学入門』武市健人訳、岩波文庫、昭和50年 p.126
- (2) 同上書 p.127
- (3) G.W.F.Hegel Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften III Suhrkamp taschenbuch Wissenschaft §.42. 邦訳、ヘーゲル『精神哲学』下、船山信一訳、岩波文庫、昭和50年 P.21
- (4) ibid. §.42. 邦訳、同上書 p.22
- (5) ヘーゲル『哲学入門』武市健人訳、岩波文庫、昭和50年 p.129
- (6) G.W.F.Hegel Phänomenologie des Geistes Johannes Hoffmeister §.79

- 邦訳、ヘーゲル『精神の現象学』上巻、金子武蔵訳、岩波書店、昭和48年 p.95
- (7) ibid. §.80. 邦訳、同上書、p.96
 - (8) ibid. §.80. 邦訳、同上書、p.97
 - (9) ibid. §.81. 邦訳、同上書、p.97
 - (10) イポリット『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』市倉宏裕、他訳、岩波書店、1989年 p.104
 - (11) 同上書、p.104
 - (12) 同上書、p.104
 - (13) G.W.F.Hegel Phänomenologie des Geistes Johannes Hoffmeister §.90
邦訳、ヘーゲル『精神の現象学』上巻、金子武蔵訳、岩波書店、昭和48年 p.109
 - (14) ibid. §.91. 邦訳、同上書、p.112
 - (15) ibid. §.90. 邦訳、同上書、p.110
 - (16) ibid. §.90. 邦訳、同上書、p.110
 - (17) D・ヒューム『人間知性研究』齊藤繁雄・一之瀬正樹訳、法政大学 出版局、2005年 p.15
 - (18) 同上書 p.15
 - (19) ヘーゲル『哲学入門』武市健人訳、岩波文庫、昭和50年 p.133
 - (20) 同上書、p.136
 - (21) G.W.F.Hegel Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften III Suhrkamp taschenbuch Wissenschaft §.46. 邦訳、ヘーゲル『精神哲学』下、船山信一訳、岩波文庫、昭和50年 P.29
 - (22) ibid. §.47. 邦訳、同上書 p.31
 - (23) G.W.F.Hegel Phänomenologie des Geistes Johannes Hoffmeister §.103
邦訳、ヘーゲル『精神の現象学』上巻、金子武蔵訳、岩波書店、昭和48年 p.129
 - (24) ibid. §.104. 邦訳、同上書、p.130
 - (25) 高田純『承認と自由』未来社、1994年 p.128
 - (26) 同上書 p.129

(Received: May 31, 2012)

(Issued in internet Edition: July 1, 2012)